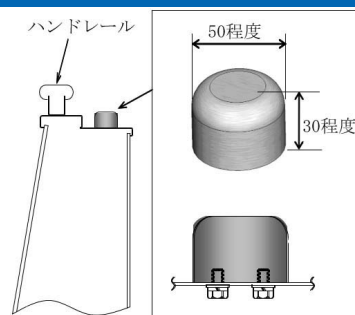


昇降機 Column ⑥

カナダに“文鎮”の文化はありや？

— 今年も、“学べるコラム”を —

■ コラムニスト、エスカレーター技術研究者 齋藤 忠一



■ 首都圏の鉄道に、久々の“新駅”が誕生

山手線と京浜東北線が走る田町駅と品川駅の間に約50年ぶりの新駅「高輪ゲートウェイ」がこの3月に暫定開業し、地下鉄日比谷線には全線開業以来56年ぶりの新駅「虎ノ門ヒルズ」駅がこの6月に本格開業する。

東京メトロの霞ヶ関駅と神谷町駅の間で神谷町寄りの「虎ノ門ヒルズ」駅は、片仮名交じりでも大した反対運動もなくスンナリ決定したらしいが、JR東日本の「高輪ゲートウェイ」駅は、高輪と離れた〈港区港南二丁目〉に立地し、2024年の完成をめざして進行中の「品川再開発地域」の色合いが強く、しかも片仮名の〈ゲートウェイ〉がつくことから賛否渦巻いた命名らしい。

どちらの駅も、今夏開催される東京オリンピック、パラリンピック（編集注：このコラムは1月に投稿いただいたものです。）に合わせた供用開始と聞くが、最新の“バリアフリー駅”として相当数のエレベーター・エスカレーターが設置されているものと期待される。

小欄の6回目は、若い時分の失敗話や変わった駅名のことなどについて書こうと思う。

■ “ゲートウェイ”と聞いて思い出した一

英語嫌いではなかったせいか、若い時分に輸出の仕事をした時期がある。その頃、すぐ上の先輩がアメリカにエスカレーターの据付指導に出かけ、自分は英語とインチ表記の組立図を担当した記憶がある。

具体的には、同じ国のどこかの州の「GATE WAY CENTER」納めの据付資料を担当したのだが、当時は「GATE WAY」を直訳して、外国映画で観るような大邸宅の屋敷に車を乗り入れる「扉がついた道」と理解していたが、広辞苑（新版）に「プロトコル変換器の一種」（プロトコル：コンピューターシステムで、データ送信を行う規約）の「コンピューター用語」と載っているから、まさに“隔世の感”と言えよう。

さて、本題—その後、「簡単な設計は任せる」の許可が出て、カナダの某地下鉄向けに“アンチスライドノブ”（上掲イラスト：外側を滑り落ちるものの受け止め具）を設計したことがある。直径50mm、高さ30mmのステンレス丸鋼を仕上げたものだったが、外デッキカバーの裏側に設けた固定ねじを1本にしたのがいけなかった一開

業数日で消えた（手で回してみると、確かに外れる）…咄嗟に考えたのは「英語圏のカナダで日本で言うところの“文鎮、ぶんちん”を使う文化があるのか？」だった（英語にPaper weightの名詞はある）。その答えはいまだに知らないが、顧客仕様に従い1mの等間隔で10個ほど取り付けたものが飛び飛びの“歯っ欠け”状態になって評判を落とした…その後、固定ねじを2本にして（手では回らないように）対策したのはもちろんである。

■ 片仮名の“駅名”など一

自分で書き出しておいてどうかと思うが「高輪ゲートウェイ」駅のように片仮名の駅が珍しいわけではない。JR九州に「ハウステンボス」や「スペースワールド」、JR四国に「オレンジタウン」、JR西日本に「ユニバーサルシティ」があり、JR東日本では、冬季臨時駅「ガーラ湯沢」が先輩格と言える。ほかに関東では、「スポーツセンター」（千葉都市モノレール）、「テレコムセンター」（ゆりかもめ）などもある。

片仮名に限らず、珍しい駅名に出会うと“駅名標”をしばしば眺めることがある。北海道の「あんそろま（安足間）」、「おたのしけ（大楽毛）」、東北の「のぞき（及位）」、「あてらざわ（左沢）」、「あやし（愛子）」、「ごさんねん（後三年）」には驚いた。

■ “学べるコラム”をめざして一

設計時代の“失敗話”から駅名まで筆を滑らせたが、身の回りには知らないことが多過ぎる。駅名もそう、歳時記や季節のこともそう、自然や花のこともそう…

ひょっとして「自分のことか？」と思う川柳生まれの諺がある「大男総身（そうみ）に知恵が回りかね」（身体ばかり大きくて愚鈍な男を言う）、対義語に「小男の総身の知識は知れたもの」もある。…今年からは「学べるコラムを」と思ったのだが、このコラム、“会話上手”のための話題作りに役立つそうですか？

昇降機Columnの連載は今号で最後となります。
齋藤様、ご寄稿ありがとうございました。

（編集委員会一同）